わたしの聖戦ジハード

女性が働くということ 連載243回

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

電子書籍で読書はできない

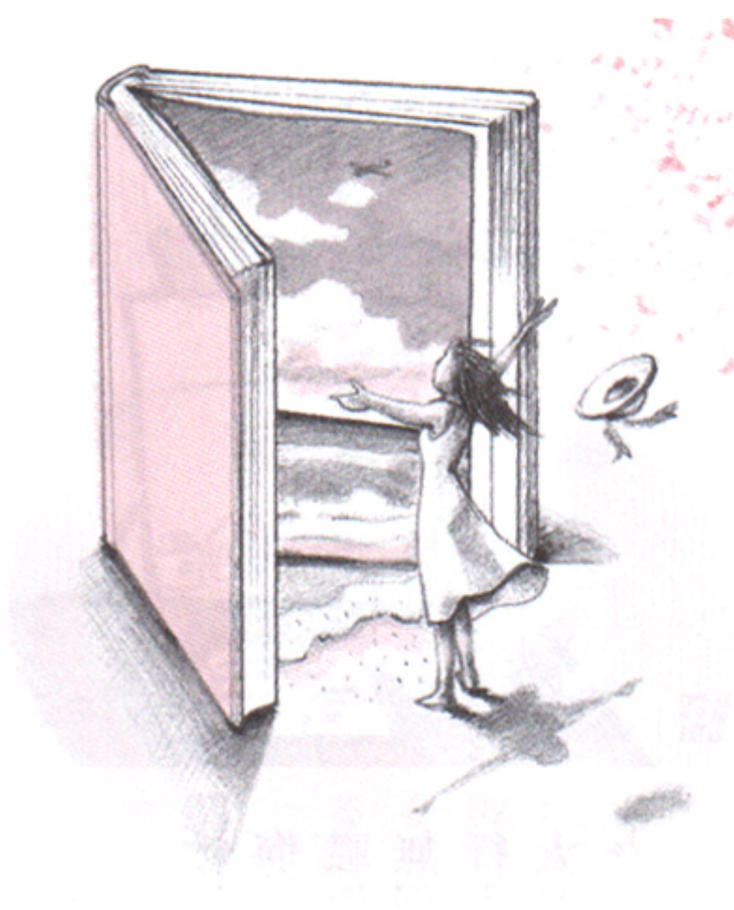
読書好き・活字中毒を自認する私にとって、何をどう読むかは結構大切な問題である。

これまで、アナログ人間らしくフツーに本を購入し続け、バッグの中には必ず本が1冊ないと落ち着かないほどだった。

最も読書がはかどるのは何といっても移動の時だ。新幹線や飛行機の中は、私にとって最高の読書部屋。長い道のりもまったく気にならず、むしろ本が読める環境に身を置けるのが何より嬉しい。まして、読んだ本が予想以上に面白かったりすると、人生の喜びのほとんどを手に入れたような昂(たかぶ)りに包まれるというものだ。本好きには珍しくないが、本に夢中になりすぎて駅を降りそこなったこともあるし、目的地に着く時間になると、本を閉じなければならないのが本当に残念だったりする。

そんな私も、遅ればせながら電子書籍に取り組んでみることにした。手元にありながらほとんど使っていなかったiPad（タブレット端末）をふと使う気になった。そこそこの重さはあるものの、薄いぶん持ち運びが手軽だ。これならバッグが妙な形に膨らむことも、書籍の表紙が折れてしまうこともない。

期待感いっぱいで、あらかじめいくつかの本をインストールしたiPadとともに列車に乗った。最初の挑戦は、海外のミステリーもの。一見、何の関係もない人々が次々に殺されていくという、いわばミステリーの王道物、面白くないわけがない。



これは、電子書籍の持つ「平坦さ」が、読書の楽しさを邪魔しているのではないか、と思いいたった。

例えば、紙の本で描かれる人物像や風景の描写は、私の脳に十分なイマジネーションを与えてくれる。会ったこともない人物のセリフは現実味を持って私に語りかけてくれるし、行ったことのない外国の街の様子も、すぐさま脳裏に浮かぶ。読書をするときには行間を読みなさい、とよく言われたものだが、それは紙の本だからこそ可能であって、電子書籍では無理なのだ。味気ない、単なる文字が画面に羅列しているだけのしろもの。したがって、ストーリーに入り込むこともできず、深みもなく、人物に感情移入などできるわけがない。

ところが…。これが全くつまらないのだ。紙のページをめくる喜びと期待感、その独特の匂いはもちろんないし、そんなものははなから期待していない。では、ストーリーそのものが退屈なのだろうか？

いや、そうではない。これは、電子書籍の持つ「平坦さ」が、読書の楽しさを邪魔しているのではないか、と思いいたった。

例えば、紙の本で描かれる人物像や風景の描写は、私の脳に十分なイマジネーションを与えてくれる。会ったこともない人物のセリフは現実味を持って私に語りかけてくれるし、行ったことのない外国の街の様子も、すぐさま脳裏に浮かぶ。読書をするときには行間を読みなさい、とよく言われたものだが、それは紙の本だからこそ可能であって、電子書籍では無理なのだ。味気ない、単なる文字が画面に羅列しているだけのしろもの。したがって、ストーリーに入り込むこともできず、深みもなく、人物に感情移入などできるわけがない。

これはいけない。私はとんでもないものを手に取ってしまった。そんな後悔にさいなまれながら、深い失望のため息をつくこととなった。

私だけなのかと思いきや、本好きの知人はほぼ同じ感想。なぜか、コミックならいいのだが…というのも似た思いである。

近年は、子どもたち全員にタブレットが配られていると聞くが、タブレットで何をしようとしているのか、今さらながらゾッとしてしまう。

ネットの普及は産業革命以来の革命であり時代の大転換であることに異論はない。私自身、その恩恵に十分あずかってもいる。しかし、電子書籍では本は読めない。この違和感が、原始的な、人間としての判断ゆえなら、私はむしろそれを誇りに思いたい。

イラスト・伊藤香澄